

釘 ぬ き

名古屋大学 森 下 一 期

木工用の道具には、切ったり削ったりするものはたくさんあります。それらは形を変えていくものです。そして、多くの場合、もとはにもどりません。このような中で、もとの状態にもどす道具としての、釘ぬき はめずらしい道具と言えるでしょう。うまく使うと大変ありがたい道具となります。

釘を打ち間違えたときにすぐ修正できます。いらなくなった木製品を分解して、その材料を他のことに使うことができます。釘ぬきがないと、無理に引きはがしたり、金づちでたたくので、材料がダメになってしまいます。

普通の釘ぬきは30cmぐらいの長さですが、建築物解体などに使うものとして、1mぐらいのものもあります。その中間のものもありますが、大きなものは（これはパールと呼んでいます）、図1のように真直ぐの方が平になっていて、木のスキ間に入れてこじるのに便利になっています。

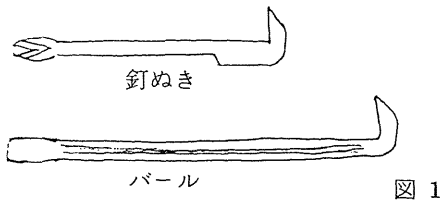


図 1

釘を抜く

抜く釘の長さ、太さに合わせて、釘ぬきを選ばないとうまくぬけません。V型の口が釘にうまくかまなければ、どう工夫しても抜くことはできませんが、釘にかめば、図2のような工夫をして、抜くことができます

図 2



大きな釘を抜くときは、かなり力が必要です。とくに古い釘になると、さびが出ていますから、余計力が必要となります。したがって、釘ぬきをあてる方向を考えて、力を有効に働かせることを考えなければなりません。材料自体も抜く作業に関係するというのを頭に入れておきましょう。(図3)。

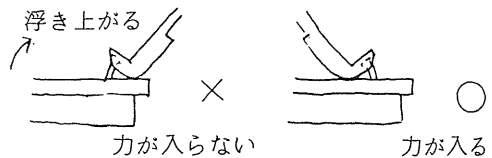


図 3

釘の頭が出ていないときどうするか

一つには、板を裏からたたいて、釘の頭を浮かせる方法があります。スキ間に平な部分をたたき込んで頭を浮かせる方法もあります。この時は材料にキズがつきやすいものです。

もし、厚い木に打ち込んである釘で、上の方法が使えなかったらどうするか。木の表面を少しキズつけることにはなりますが、釘ぬきのV型の口の片方が釘の頭の下にくるように木にたたき込み、こじあげて頭を浮かすようにします。

釘ぬきは一見金属の棒をまげて口をつくっただけの道具、といったように見えますが、どこを曲げるか、どのようなカーブで曲げるかで、釘を抜く能率が大幅違うということです。また、V型の口も、そのつくり方で、釘にガッチリ食い込んで、確実に抜くことができるかどうかが決まると言います。釘ぬきづくりの名人もいたという話も聞きました。